

わが国におけるザルツマンの教育思想の受容

—Salzmannsschule の創設 200 年を記念して—

黒 澤 英 典

I はじめに

わが国の近代教育が示した目覚しい進歩については、内外の関心をあつめて久しい。しかし、日本教育の近代化していく過程には、どの時期にも、どの問題においても欧米の教育の影響が大きく働いている。その影響力の働き方、受け入れ方、働きかけ人、受け入れた人または受け入れる媒介者について、精密な、そして科学的な調査研究をすることが、近代日本の教育を理解する重要な方法の一つであろう。

ここでは、1904年（明治37年）大村仁太郎によって、わが国に始めて紹介されたドイツの汎愛教育者ザルツマン（Salzmann, Christian Gotthilf, 1744～1811）の教育思想の受容の経緯を明らかにしようと意図するものである。

ここで、この研究調査の直接の発端をつけ加えたい。それは1965（昭和40）年1月26日付、東ドイツのSchnepfenthalのSalzmannsschuleからの一通の手紙であった。発信人はInge Pfauch-Ausfeld 夫人から、東京大学図書館あてであった。

回送された手紙の内容は「文献から知ったところでは、1932（昭和7）年にデッサウ（Dessau）の汎愛学校（Philanthropin）でドイツの教育家バセドウ（Basedow, J. B.）・ザルツマン（Salzmann, Ch. G.）を調査した田花為雄教授の研究業績を知りたい」という趣旨の文面であった。

筆者は、田花為雄教授の指導のもとに「日本における Salzmann の受容」についての調査を始めた。この間の様子については、教授の随

筆集『巡礼想感抄』（206頁～208頁）を参照されたい。こうして調査したものを、教授は3月末に Inge 夫人のもとに送ったのである。

その後17年あまり経過した一昨年（1982年）春、Inge Pfauch-Ausfeld 夫人から、田花為雄教授と筆者のもとに一冊の書籍が送られてきた。それは、Wolfgang Pfauch と Reinhard Röder 編の C. G. Salzmann-Bibliographie（Weimar, 1981）であった。この本の序文の中で田花為雄教授の送った「日本におけるザルツマンの受容」が契機となって、世界30カ国におけるザルツマンの教育思想の研究・受容についてまとめたものであることが、謝辞の言葉と共に述べられていた。

1984年はザルツマンがシュネップエンタールに理想に燃えてザルツマン学校（Salzmannsschule）を開校して、200年を迎える記念すべき年でもある。しかし、この研究を発意し、御指導を賜わった田花為雄教授は昨年（1983年）7月19日にご逝去された。

この拙い小論を田花為雄教授の在りし日を忍びつつ、霊前に捧げる次第である。

II ザルツマンの人と業績

本論に入る前に、簡単にザルツマンの人と思想について紹介しておきたい。クリスチャン・ゴットヒル・ザルツマン（Christian Gotthilf Salzmann）は、今日汎愛派教育思想を実際の方面で発展させた第一人者として、西洋教育史では位置づけられている。

ザルツマンは、1744年6月1日にドイツのエルフルトの近郊ゾンメルダに生まれた。父は敬

虔な教養のある牧師であり、5歳のころから母より読み方、道徳的詩の暗誦の指導が行われた。12歳でランゾゲルザルツアのギムナジウムに入り、1761年イエーナ大学に入学して神学を研究し、1768年ロールボルの牧師となった。この時バセドウ (J. B. Basedow, 1723~1790) の書を見て学校設立を企てた。1781年デッサウの汎愛学校 (Philanthropinum) に宗教教師として赴任し、また著作に従事した、しかし、同校教師の著作に関する学校内規をめぐって学校当局との間に意志の疎通が起り、またこの学校の管理そのほかが自己の所信とことなることもあって、1783年汎愛学校をやめ、翌年ゴータ (Gotha) 侯の後援のもとにシュネップエンタール (Schnepfenthal) に、彼の理想の学校 (Erziehungsanstalt) を開設し、1811年10月31日没するまで“父ザルツマン”として多くの子弟の薫陶に献身するかたわら教育的著述に従事した。この学校は“ザルツマン学校” (Salzmannschule) といって、いまでもその名称だけは存続している。

今から100年前、創立100周年を記念して出版された『シュネップエンタール学校100周年記念誌』 (Festschrift zur Hundertjährigen Jubelfeier der Erziehungsanstalt Schnepfenthal, 1884) によると、最初の生徒はザルツマンの三男のフリードリヒ (Friedrich Salzmann, 1774~1850) とザルツマンのよき協力者アウスフェルト (Georg Gottlob Ausfeld, 1740~1782) の長男ウィルヘルム (Wilhelm Ausfeld 1776~1853) で、入学したのは1784年3月7日であった。

また、『シュネップエンタール150周年記念誌』 (Die Erziehungsanstalt Schnepfenthal, 1784~1934) によると、この間ここで学んだ生徒は2,416名、教師は280名にのぼる。

ザルツマンの教育の理念は、学校は校長の一手に統率されるべきもので、生徒は校長を家長とした家族的組織のなかで生活すべきものとした。さらに、田園での教育を理想として、今からちょうど200年前、シュネップエンタールに

ザルツマン学校が生れたのであった。この精神と施設とは後の田園家塾 (Landerziehungsheim), なかでもリーツ (H. Lietz) のそれとまったく同じである。

教育の目的を健康・理知的・善良・快活な全人の陶冶において体育をも重んじ、よき教育は道徳の基礎の上にのみありうるので、正しい学校教育は学習と修徳を包括するものでなければならないとした。

道徳教育には教師の人格が何物よりまして必要であり、褒賞は必要であるとした。また生徒に勤労のよろこびと公共のために働く憧憬とをうえつけなければならないとした。

彼の学校では、各教科等のほかに、作業・徒歩旅行があり、生活がすなわち教育であり、学習も労作的であって、後にケルシェンシュタイナー (Georg Kerschensteiner) は、18世紀の理想的な労作学校 (Arbeitsschule) として評価したのはこのためである。同時代者ペスタロッチ (Johann Heinrich Pestalozzi, 1746~1827) とは、思想上直接の連絡はないが広くみれば同一線上に位置する点が少なくない。

さて、多くの汎愛学校は歴史の変動の中でつぎつぎと廃校となり史上から姿を消したが、ザルツマンのこの学校は、唯一の汎愛学校として生き残り、第二次世界大戦の終戦を迎えた。ドイツは不幸にも東西に二分した。

シュネップエンタールの在るテューリング州は東ドイツ (ドイツ民主主義共和国) の一州となった。東ドイツ憲法 (1949年10月7日) を施行して、学校をすべて公立とし、公立学校の代用としての私立学校を認めない。165年間続いたシュネップエンタールのザルツマン学校の終焉の時であった。

1934年校主ドクトル・フリードリヒ・アウスフェルトが死亡した後、未亡人 (1951年死亡) を校主として、私立学校として1944年に到る。

1944年秋からザルツマン学校はテューリング州に賃貸される。1945年から46年までは学校の授業は中断された。

1946年テューリング州と賃貸契約を結ぶ。

テューリンゲン州は校名をそのままにしてザルツマン学校を寄宿制高校学校として継続して使用する。

ザルツマン学校の所有者はエー・アウスフェルトである。ザルツマンの遠孫のアウスフェルト家族は、私人としてここに住み、ザルツマン学校の文化的遺産を管理しているが、校務には直接関与していない。

この研究の直接の契機となったインゲ・プアウフ-アウスフェルト (Inge Pfauch-Ausfeld) 夫人は、ザルツマン学校の所有者エー・アウスフェルトの妹である。現在ザルツマン学校 (Salzmannschule) のガルテンハウス (Gartenhaus) に住んでいる。

「ザルツマンの体系的な著作目録」を示すと次のようである。

- 1.0 *Pädagogische Schriften*
- 1.1 Das Philanthropin Schnepfenthal betreffend
 - Noch etwas über die Erziehung.....1784
 - Nachrichten aus Schnepfenthal für Aeltern und Erzieher1786
 - Nachrichten aus Schnepfenthal für Eltern und Freunde der dasigen Zöglinge1790
 - Über die Erziehungsanstalt zu Schnepfenthal1808
- 1.2 Unterhaltungs- und Erziehungsschriften für Kinder
 - Unterhaltungen für Kinder und Kinderfreunde1778
 - Moralisches Elementarbuch.....1782
 - Charaden1784
 - Reisen der Salzmannischen Zöglinge...1784
 - Nachrichten für Kinder aus Schnepfenthal1787
 - Bibliothek für Jünglinge Mädchen ...1787
 - Konrad Kiefers ABC- und Lesebüchlein.....1798
 - Erster Unterricht in der Sittenlehre...1803
 - Reisen der Zöglinge zu Schnepfenthal1799
 - Heinrich Gottschalk in seiner Familie1804

- 1.3 Schriften für Lehrer und Eltern zur Kindererziehung
 - Krebsbüchlein1780
 - Über die wirksamsten Mittel.....1780
 - Über die heimlichen Sünden der Jugend1785
 - Konrad Kiefer oder Anweisung zu einer vernünftigen Erziehung1796
- 1.4 Erziehungsschriften für Erwachsene
 - Ameisenbüchlein1806

2.0 *Romane, Robinsonaden und sonstige Erzählungen*

- Carl von Carlsberg oder über das menschliche Elend1783
- Sebastian Kluges Lebensgeschichte (1789) 1790
- Constants curiose Lebensgeschichte (1790) 1791
- Ausführliche Erzählung wie Ernst Haberfeld aus einem Bauer ein Freyherr geworden (1803) 1805
- Joseph Schwarzmantel (1808) 1810
- Heinrich Glaskopf (1810) 1820
- Die Geschichte des Landrichters Pappel..... (1812) 1841
- Geschichte Simon Blaukohls... (1811) 1846
- Erzählungen aus dem Thüringer Boten (1797) 1846
- [Enthält : Die Geschichte von Columbus und die Geschichte der Schildebürger]

3.0 *Biographien*

- Märkvärdige Mänds Levnetsbeskrivelser (1797/98) 1800
- [Lebensbeschreibung merkwürdiger Männer, dänisch. Enthält : 1. Benjamin Franklin. 2. Hans Egede. 3. Columbus. 4. Wilhelm Penn.]
- Denkwürdigkeiten aus dem Leben ausgezeichneter Teutschen1802

4.0 *Allgemeine philosophisch-philanthropische Schriften*

- Beyträge zur Aufklärung des
menschlichen Verstandes1779
- Der Himmel auf Erden1797
- Über die Erlösung der Menschen vom
Elende durch Jesum1789

5.0 Theologische Schriften

5.1 Allgemeine theologische Schriften

- Predigten für Hypochondristen1778
- Disputationis theologiae de praeparatione
theologi particula I.1767
- Predigt bey seinem Abschiede von
Erfurt1781
- Christliche Hauspostille1792

5.2 Schriften zur Liturgie

- Beyträge zur Verbesserung des öffentlichen
Gottesdienstes der Christen1786
- Gottesverehrungen gehalten im Betsaale
des Dessauischen Philanthropins1781
- Verehrungen Jesu, gehalten im Betsaale
des Dessauischen Philanthropins1784
- Gottesverehrungen, gehalten im Betsaale
zu Schnepfenthal1788

6.0 Streitschriften

- An den König der Briten über die
Gottheit Christi1786
- Apologie des Carl von Carlsberg1787
- Pädagogische Bedenken über die Schrift
des Hofrates Faust1791

7.0 Politische Schriften

- Revolutionsgespräche, gehalten von dem
Boten aus Thüringen mit seinem Wirte
und einem Weber(1794) 1794
- Taschenbuch zur Beförderung der
Vaterlandsliebe1801

8.0 Sonstige Schriften

- Scarriophlebasophibalsamosimoidon oder
ein Räthsel1792
- Auserlesene Gespräche des Boten aus
Thüringen1791

III 大村仁太郎の翻案

わが国の明治以後の教育の理論及び実際の推移をたどるとき、そこにはドイツ教育思想の推移の反映を看取することができる。

外国思想の影響を顧慮しつつ明治以後の教育史を概観するとき、大体において明治20年前後を中心として大別することができる。明治20年以前の日本の教育は主としてアメリカを中心に、イギリス・フランス等の影響の下にあり、明治20年以後昭和20年の終戦までドイツの影響の下にあった。

特に明治20年代以後明治30年頃まではヘルバルト派教育理論の全盛時代であり、その隆盛の直接原因は明治20年にドイツ人のエミール・ハウスクネヒト (Emile Hausknecht) を東京帝国大学の教育学の講師として招聘したことによる。ヘルバルト派の日本教育界における影響力は大きいといえる。

さらに、明治の末年から大正にかけては社会的教育学・実験教育学・人格的教育学の影響の下にあり、終戦までは文化教育学の強い影響の下に置かれた。

さて、ザルツマンの教育思想が、わが国に始めて紹介されたのは1904(明治37)年であった。この明治30年代は、ヘルバルト派教育理論の影響力の強い時代であった。

紹介者は学習院のドイツ語教授であった大村仁太郎(1863~1907)であった。彼は1901年から1903年までドイツに留学していた。そして、独逸学協会学校を経営する。

大村仁太郎によって、わが国に紹介されたザルツマンの書物は次の三書である。

- Krebsbüchlein oder Anweisung zu einer zwar nicht Vernünftigen aber doch modischen Erziehung der Kinder, 1780 (教育寓話『我子の悪徳』明治37年)
- Konrad Kiefer oder Anweisung zu einer Vernünftigen Erziehung der Kinder 1796 (教育寓話『我子の美德』明治38年)
- Ameisenbüchlein oder Anweisung zu

einer Vernünftigen Erziehung der Erzieher, 1806 (『教育者の教師』明治39年)

『我子の悪徳』の奥付を見ると、最初の出版が明治37年12月17日であるが、翌年3月までに8版を重ねている。また、『我子の美德』は、最初の出版が明治38年7月13日であるが、翌月の8月9日には7版を重ねている。今日とは当時は出版の状況も異なっているが、しかし単期間に多くの人々に読まれたことが推測される。そして、明治44年には大村教育著述全集として出版された。その後も多くの人々に愛読された。

“Krebsbüchlein” (『蟹の書』) では「子どもの凡ての欠点及び不徳の原因は、大部分、父または母に求むべきである」との立場から「児童の不合理な取り扱い」につき諷刺的に述べ、“Konrad Kiefer” (『コンラート・キーフェル』) は、これと反対に、特に幼児の合理的な教育法を物語風に述べ、“Ameisenbüchlein” (『蟻の書』) は、教育者になろうとするものに向けられ、教師の任務は諸能力を発展させ、訓練することによって、子どもを人間にまで育成することであるとし、成長・発達こそ教育の本質であるが、この任務の達成には、教育者自身先ず教育された人でなければならないとしている。

1. Krebsbüchlein (教育寓話『我子の悪徳』) について

大村仁太郎は“Krebsbüchlein” (『蟹の書』) を『我子の悪徳』と題して麗筆で翻案した。その第11版発刊の序として、次のような一文を寄せている。

「凡そ国民の消長を司るもの、教育より先なるはなかるべし。而して其第一義が、児童の教育にあるは、識者を俟たずして明かなり。

今や吾が国の文物典章一として備はらざるなく、聖代の英華、優に万邦の雄たるに足る、然も顧みて国民発展の根本義たる児童教育の現状を窺へば転々惆悵の情に堪へざるものあり。是

れ蓋し其発展の行程が、歴史的過去に乏しきと同時に、其実行の方法が、極めて困難なるに由らずんばならず、余は爰に於て微力をも顧みず、自ら此至難の事に当りたるも、前程を望み見れば、独り日暮れ途遠きの感なき能はず。

然れども事や国民の発展に至大の影響を及ぼすもの、乃ち奮って児童教育に関する諸書を公にし、さきにまた本書を編述して之れを世の父母及教育者諸彦の座右に呈せり、本書は元より不文蕪雑、児童教育の真髓を明かにする事態はざりしにも拘はらず、発刊以来半歳ならざるに、爰に拾有壱版を重ねるに至り、幸にして江湖の一顧を得たるに似たるは、余の大に悦ぶ所なり。

吾が国は世界の強国と戦端を開きしより既に十有六月、社会の耳目は悉く戦局の発展に集注するの觀あるに当り、此乾燥無味なる教育書にして短時日に斯くも数版を重ねるに当りしは、吾人をして少しく異様の思あらしむと雖も、翻って考ふれば、是れ自ら吾が国民の綽々として余裕あるを證するものにして、戦時多忙の際と雖も、外武威を伸張すると同張すると同時に、内文事を忽諸に附せざる大雅量の致す所に由らずんばならず。

吾が国の事々物々が、毫も戦争の影響を蒙らず、極めて健全なる情態にありて、秩序的進歩を遂げつつあるは、吾人の欣喜に堪へざる所。而して本書が幸にも此事実を證明するの一材料たるを得たるは、余の洵に光榮する所なり。

本書出版以来、読者諸君より書を寄せらるゝもの頻々、或は讃辭を賜はり、或は高評を辱す、而して

……此書を読む世の父母長者たるものは、自己が今日まで子女幼者に対して把持したる誤謬と罪惡とを発見し今更の如く慚愧悔改の情を催ふすと共に、真の悔悟に伴ふ新たなる光明を発見し、親子自然の情誼を全うすることと思はれます。

余は此の書を読んで、訓導裨益せらるゝ所多く、幸にして未だ『我子の悪徳』を養成する機会なかりしと雖ども、余の掌中に将来の運命を

託されつゝある一人の幼弟に対しては、今後大いに其態度を改むる必要を感じたのであります。

本書の如きは唯快樂を以て之を読むべきものにあらざして、必ずや涙を伴はざれば、真に読みしとは云ひ難いと考へます。

我国の父母、長上たるものが、之を座右に秘藏して、熟読玩味、以て子女を教育し、弱者を訓導するの師範となされなば、我国将来の家庭教育が、一新紀元を開くは勿論、人道の問題が深く家庭にまで行はれて、親子長幼の間、最も完全なる孝道情誼の成るに至るは疑ふべからざることにして、之がため唯に家庭の幸福を増進するのみならず、国家の慶福之に過るものはないと考へます。(中略)余は感謝と歎喜と希望と責任とを以て、世の未だ本書を読まざる父母長者が必ず一本を座右に備へられん事を望み、爰に本書を紹介致す次第であります。(大日本婦人教育会雑誌第百七十二号)

以上の如き高評をすら寄せられたるあり、余は元より之れに当らずと雖ども、然も本書が児童教育上、多少裨益する所ありしならんには、余の満足や実に大なりと云ふべし。

今や余は、本書の対偶として、「我子の美德」なる一書を公にせんとす。希くは世の父兄及び教育者諸賢が、彼れと是れとを対照して、以て教育上の参考に供せられん事を。

爰に第十一版を發刊するに当り、聊か思ふ所を述ぶ。

明治三十八年五月廿九日

第二大洋艦隊全滅の捷報到着の日に於て

大村仁太郎識す」

また、明治四十二年七月には第21版を出版することになるが、その序文で友人の芳賀矢一は次のように述べている。

「倫理を説きながら非倫理の行を敢てし、教育を論じながら非教育の家庭を作つて居る人の多い今の世の中、故大村君の如きは真正な道德実践家として、教育實際家として、余の最も尊敬した一人であつた。

君が素行の立派であつたこと、家庭の美しかったことは云ふまでもない。深奥な独逸学の造詣を本として夙に学校を経営し、又多くの著書を公にして、一面には青年子弟を教養し、一面には家庭の父母を訓戒せられた。

君の事業が君の早世とともに頓挫したのは、真に我が教育界の一大損失であつて、おもへばそれも早や三年の昔となつた。

本書『我子の悪徳』は君が晩年の著書の一つで、君がとくに白玉楼中の人となつたのにも拘らず、今尚洛陽の紙価を貴からしめて居るものである。聞けば此度更に第二十一版を出すに就いて、新に君が遺稿の幾篇添へたといふ。

一版を一千部とすれば、本書は既に二万の家庭に読まれた上、尚其の需要が盛なのである。君の経営した独逸学協会学校は全国唯一の独逸語中学校として、年々幾多の俊才を国家に造り出して居る。君の著述は本書をはじめ、すべて幾十版を重ねて、教育界に貢献して居る。君の死は形骸の死で、君の精神は永久に今の世を指導して居るのである。

余は君の晩年十五年間の友人である。平素君から益を享けたことは挙げるに暇が無い。就中君の人格から多大な教訓を受けた。君は何事にも極めて真摯な熱誠な人であつた。君の書を著すには有形上無形上自己の利益といふことは毫も眼中に無かつた。世の為人の為といふ真情から筆を執つたのが、君の著書の大に世に行はれた所以である。」……(以下省略)

この書がわずか五年の間に二万部も出版され家庭で読まれたということは、当時の出版状況から考えて驚異的なことではなからうか。

また、こうした書を渴望する教育状況があつたと考えられる。

初版の序文の中で、大村仁太郎は「家庭に於ける不良なる教育の原因は父母にあり、然れども父母は之れを自覺せざるなり若し児童をして善良なる教育の効果に俗せしめんと欲せば、先づ父母をして不良なる家庭教育の根源は何れに在りやを知らしめざるべからず」と述べて居り、さらに大村仁太郎がザルツマンの本書

(Krebsbüchlein) を翻案し紹介する意図を次のように述べている。

「氏（ザルツマン）の周到なる観察は、一々児童に対する教育の弊害を列举し此間更に秋毫の仮借する所なきや、氏惟へらく、悪徳悪習を列举して能く之れに触るゝ事なからしめば、之れ疑もなく美德教育を行はしむる所以なりと、是れ氏が其著書に題して非理の教育法又は悪徳の養成法と云ひ、而も微意を其裡面に寓せし所か、氏の著書世に出でしより既に百余年、此間急激なる時勢の変遷に伴ひ、教育の事又大いに推移せるものあり、随て父母の児童に対するが如きも、更に其面目を一新せるものあるは疑ふべくもあらず。

然も今日幾多の家庭を見るに依然として、氏が列举する過失を踏襲するなきを保せざると同時に、父母矛盾せる教育の下に、益其運命を過つの児童尠ならず。是れ予が氏の著書に基き、仍ほ彼我の人情風俗に鑑み、本書を編述し、謹んで之を世の父母たる人に献ぜんとする所以なり。……中略……

ザルツマン氏の悪徳養成が一名蟹の横這ひなる奇異の標題を冠せられたるは、一見まことに異様の感あれども、是れ氏が該書を出版したる当時、其表装に一疋の親蟹三疋の子蟹を率いて河畔に逍遙するの図を現はしたるに因る。而して其寓意は、実に実践躬行に非ざれば教育は其効果を挙げ難きを示すにあり、親蟹曾て子蟹に訓誨して謂ひけらく、

汝等決して横行する勿れ、只正しきに随て直行すべし、

と子蟹は親蟹の命を聞いて答ふらく

父よ、請ふ自ら直行せよ、児等は悦んで父の為す所に従はん。

と、然れども親蟹は今日に至りても依然として横行し、子孫連綿百世に至りて直行する能はず、是れ即ち氏の著書が蟹の図を表装に掲げ、其意のある所を示したるなり。」

両親の生き方が子どもに影響することを物語っている。

この『我子の悪徳』の内容を知るために目次

を見ると次のようである。

第一章 世の父母に警告す

第二章 悪徳悪習の養成法

- 1 讒誣陥擠の悪徳を養成する方法
- 2 善事を嫌ふ習慣を養成する方法
- 3 無用の長物を製造する方法
- 4 強情なる人物を養成する方法
- 5 不平家を養成する方法
- 6 鄙吝家を養成する方法
- 7 懶惰者を養成する方法
- 8 乱雑なる人物を養成する方法
- 9 不器用なる人物を養成する方法
- 10 訓戒を蔑視する悪習を養成する方法
- 11 虚飾を好む人物を養成する方法
- 12 偏狭なる人物を養成する方法
- 13 疑念深き人物を養成する方法
- 14 父母を軽視する悪習を養成する方法
- 15 仲の悪しき兄弟を養成する方法
- 16 無情な人物を養成する方法
- 17 我儘なる人物を養成する方法
- 18 虚言者を養成する方法
- 19 痴愚者を養成する方法
- 20 盗食の悪習を養成する方法
- 21 大食家を養成する方法
- 22 惨酷なる人物を養成する方法
- 23 復讐心を養成する方法
- 24 嫉妬深き人物を養成する方法
- 25 他人の損害を喜ぶ悪質を養成する方法
- 26 無害の動物を嫌悪する習慣を養成する方法
- 27 無趣味なる人物を養成する方法
- 28 臆病者を養成する方法
- 29 累弱なる身体を作る方法
- 30 種々の悪徳を養成する特効ある方法六種

2. Konard Kiefer oder Anweisung zu einer Vernünftigen Erziehung der Kinder (教育寓話『我子の美德』) について

大村仁太郎はこの書の序文の中で次のように翻案の意図するところを述べている。

「ザルツマン氏の『理想的教育』を翻案し、時勢及び国土民俗の差異をかんがへ、大に取捨折衷して『我子の美德』と名付け、世に出す事に致しました。『我子の悪徳』と相俟って、児童教育の上に幾分の参考ともなれば無上の光栄と存じます。……」

ザルツマン氏の本著は、児童の教育法を家庭物語の体に叙説したもので、コンラート・キーフエルと云ふ子供の出生より筆を起し、婚礼の慶事に結んだものであります。抑もザルツマン氏が此物語体を選んだのは、ルソー氏の『エミール』に模倣ったものでありまじやうが、革命的ルソー氏の作が、専ら理想に馳せて、実際にくらく、其外觀は教育的物語なれども、内容に至っては、著者一個の理想談に過ぎず、従て実際に適応せぬものが十中の五六占むるに反し、ザルツマン氏の此著は、ことごとく実地に準拠し、実行に重きを置いた点に於て、大に其特色を発揮して居るのであります。……中略……

この書には、世の辛酸をつぶさに味って人情風俗の機微を洞察した老練家が、豊富なる経験と円熟せる思慮とを以て、諄々として説いて倦まざるの趣があります。更にルソー氏の『エミール』が、教育の本舞台たる家庭の生活を疎外せるに反し、ザルツマン氏の此著は、純然たる農夫の子が、忠良淳樸を旨とする父母の家庭に在って、傍ら達識なる一教育家の誘導を受けつつ人と為った事を抽出し、精細に家庭教育法を叙述するに努めた点に於て、遙に彼に優って居ると認められているものであります。

もっとも斬新とか高雅とか云ふ方面から見ると、ルソー氏の作に一步をゆづらねばなりません。ルソー氏の作は、新智識新主義を標榜して、兎も角も、教育史上に一新紀元を開いたもので、殊に其富瞻なる詞藻より生まれた文字の妙は文学上より見るも、優に絶品と推れて居るのであります。

然るにザルツマン氏の文に至っては、素朴淡々、あたかも白湯を飲むが如くであります。之れは婦女子といえども、容易に了解し得るやうにと努めた自然の結果でありまじやう。殊に知

徳体の三育に通じて重要な疑問を解決し、其叙する所をして、一々実行に適せしめんとしたるは、大に多とすべき所であります。

凡そ此種の事を論ずる場合に各方面を個々別々に観察する時は、其間に統一を失ひ、調和を欠き、これを実行せんとする者をして、其適従する所に迷はしむるものであります。然るに物語体を取って、主義も、実行も、皆同一の人間に体现させたのは、即ちここに見る所があったからなので、其効果が普通の教育書などに比して遙に多大であるのは当然の事であらうと思はれます。……省略……」

以上のように、明治38年6月の初版の序文で「コンラート・キーフエル」の翻案の動機等を述べている。この書も発行して2カ月で七版を重ね当然の教育に関心をもっている人々に愛読され受け入れられた。

3. Ameisenbüchlein oder Anweisung zu einer Vernünftigen Erziehung der Erzieher (『教育者の教師』)について

大村仁太郎はこの書の序文の中で次のように述べている。

「この『教育者の教師』は、ザルツマン氏が晩年の筆に成り、経験最も豊富、思想最も円熟の妙境に生まれたもので、最も見るべき説に富んで居ります。

氏自ら「私は教育に従事すること、茲に二十有余年、此の間少からざる失敗もありましたが、幸にして種々なる方面より、児童の特性を観察し得て、幾多の経験を積むことが出来ました。故に私は老医が其の診察したる患者の病症を語る如く、十分なる確信を以て、自説を主張するのであります。」と云はれました。即ち氏自らも、本書を以て会心の作と認められたのでありまじやう。

洵に氏の言の如く、教育者に最も重んずべきは、實際的知識の豊富なる一事であります。如何程立派に哲学が研究され、卓抜なる教育的理論が構成されても、之を活用する實際家なしとせば、千百の理論も、終に砂上の偶話と選ぶ所

なしであります。

理論の如きは畢竟手段に過ぎないので、目的と云ふことは出来ません。『教育者の教師』はこゝに見る所があつて、實際家の出現を促さん為に、著わされたものであります。されば著者は本書を編むに、教育者の金科玉条を以てし、而して記述の方法は書簡文体を用い、自らが書を少壮有為の教育者に与うるに擬し、以て斯道の研究を奨励し、的確なる実験に基きて、児童教育の方法を説明し、教育者の覚醒を喚起し、教育者の修養を促し、かくて教育の真髓を悟らしめんとしたのであります。……中略……

抑も教育なるものは、今日未だ純然たる科学として成立して居るものではありません。心理学及び生理学等の研究は、益々進歩して、之を教育上に応用する大勢とはなりましたものの、未だそれを法則に帰納して、一以て之を貫くと云ふまでには到りません。

要するに教育は、未だ術の範囲にあつて、学と称せんには、なお多少不備の点があるのです。故に彼れは習うべきものであつて、学ぶべきものではありません。ザルツマン氏の『教育者の教師』が、今日に於ても、依然教育者の金科玉条たるの価値を失はぬのは、実に之が為めです。ただ百般の学芸技術が長足の進歩を為したる今日より、一世紀前の氏の説を見れば、氏の熱心に鼓吹したる事柄、例えば児童に手工を学ばしむる説の如きが、今日既に着々実行され、従つて当時の新説も、今日既に陳腐の嫌なきを得ませんが、然し之とて、寧ろ氏が教育界の偉人たることを直接に證明するもの、本書の価値が、之によりて寸毫も減ぜられるものではありません。否、吾人は氏の著書を見る毎に、恰も古典に対するが如き思を為し、真理は常に新なりの感を起すのであります。

なほこゝに一言したきは、ザルツマン氏は何故其の教育書に、蟹とか蟻とか云ふ奇怪至極の題名を選んだかと云ふ一事であります。

氏の自序によると、「背理の教育」即ち「蟹の巻」の稿を脱する頃、氏は恰も昆虫学の研究中であつたので、偶然昆虫を名とする叢書を編

もうとの志を起し、其の腹案中には、「蝸の巻」一名「背理の政府」、「蛛の巻」一名「背理の配偶」など云ふものがあつたとのことであります。

然し之は果たさずして止み、「蟹の巻」と「蟻の巻」だけが、漸く上梓の運に至つたのであります。また一には、汗牛充棟も書ならざる当時の出版社会に於て、人の注目を惹かんには、かゝる奇抜なる標題によるのが、便宜であらうとの考へもあつたのです。

然し本書の標題として、多くの昆虫の中より、特に蟻を選んだに就ては、別に少しく理由があるのです。

抑も蟻の親共は、子を産み落すと、無頓着にも何れへか立ち去つて、其の養育を一種の労働蟻に任せてしまいます。労働蟻は之を引受けて、西に東に奔走し、全力を尽して、忠実に彼等を養育するのです。

而して労働蟻は、性来清潔にして勤勉なるもの故、之に養育される蟻の子も、皆彼れに劣らぬ逸物となるのであります。……以下省略……」

内容は書簡の型式をとつて居り、第一信から第二十一信までである。

第一信 老生の主張は斯の如く候

第二信 若き雰囲気に触るものは年と共に老を覚えざるべく候

第三信 老生の教憲は斯の如く候

第四信 教育者たるものに要に猛省一番すべきこと存し候

第五信 己れを知るは知るの初めに候

第六信 教育者の境遇に就き一言申し候

第七信 児童は其の自由意思に従つて行動せしむべく候

第八信 児童に投くるに誠実の心を以てすべく候

第九信 教育の要は潜在力の活動と活動力の衝動にこれあり候

第十信 教育者は自ら教育すべく候

第十一信 教育者は身体を鍛錬すべく候

第十二信 教育者は快調なるべく候

第十三信 教育者は襟度の大ならんことを要

し候

第十四信 飾りなくありし次第を懺悔致し候

第十五信 教育者は児童と親に遺憾なきを期すべく候

第十六信 教育者は天然と人工の庶物に対して明確なる知識を要し候

第十七信 教育者は時を利用するの必要これあり候

第十八信 教育者の日常服膺^{ふくよう}すべき条項は如何なるものに候や

第十九信 教育者相互の間に於ては如何なる注意を要すべき候や

第二十信 教育者は其のあつかひ振と話振とに注意致すべく候

第二十一信 教育者は懲罰に対して如何なる注意を要すべく候や

以上に見るように具体的に教育者の在り方を述べている。

大村仁太郎の翻案に成る『我子の悪徳』『我子の美德』『教育者の教師』の三部作は、いずれも東京神田の同文館が発売元となっている。

4. 大村教育著述全集（明治四十四年五月）

この全集は大村仁太郎が明治四十年に四十五歳で逝去した後、長男大村謙太郎により、東京神田の同文館より出版されたものである。

「全集出版に就きて」によるとこの全集の構成は次の通りである。

「本全集は故人が教育上の述作を纂めたるものに、便宜上之を三巻に分ち世に公にすることとせり、第一巻にはザルツマン氏の著作を基礎として編述したる『我子の悪徳』外二書及びマチアス博士原著『太郎は如何にして教育すべきか』を収め、第二巻には『家庭教師として母』その他二書を主として婦人の教育に関するものを集め、附するに故著者が時々世に公にしたる家庭教育に関する小篇六十四種を以てしたり。また第三巻はやゝ理論に勝ちたるもの即ち『二十世紀は児童の世界』外二書を収め之に小篇十一種を添へたり。……以下省略……」

この全集は明治末年から大正年間にかけて教

育、特に子ども・そして家庭教育・婦人の教育に関心をもつ人々の間で愛読された。

IV その他の日本におけるザルツマンの著書の翻訳

1. 田制佐重の翻訳『新訳世界教育名著叢書X』

田制佐重は山形県に 1886（明治 19）年に生れ、1954（昭和 29）年に東京で死亡、早稲田大学文学部哲学科を出て、新潟県立高田中学校、早稲田大学で教えた。

この『新訳世界教育名著叢書X』はザルツマンの Krebsbüchlein『蟹の小本』（我子の悪徳）、Konrad Kiefer『コンラート・キーフエル』（我子の美德）、Ameisenbüchlein『蟻の小本』（教育者の教師）の三篇が納められている。この書は、ザルツマンの上記三編の翻案ではなくて翻訳であり、わが国における最初の翻訳紹介ということになる。

発行者は東京神田の文教書院で 1924（大正 13）年 10 月に発行された。1938（昭和 13）年 11 月までに 49 版出版されている。

この書の序文の中で、訳者の田制佐重は次のように述べている。

「一代の先覚者故大村仁太郎氏は今より 21 年前：即ち明治 37 年、ザルツマンの『蟹の小本』を翻案して『教育寓話我子の悪徳』を公けにされ、更に其の翌明治 38 年『コンラート・キーフエル』を翻案して『教育寓話我子の美德』を、更に翌 39 年、『蟻の小本』を翻案して『教育者の教師』を公けにされ、何れも洛陽の紙価を高からしめた。」

さらに田制佐重は同じ序文の中で「大村氏の述作はあくまでもザルツマンの意に基ける翻案であるのに対して、本書は、その翻訳であることを読者に向けて、特に注意して置きたいと思ふ。そして、ザルツマンの翻訳としては、本書は我が国最初のものであることも、併せて断って置かう。」と述べている。

この田制佐重によるザルツマンの翻訳もわずか 14 年間に 49 版を重ねていることからしても、広く多くの人々に愛読されたといつてよ

い。

1931（昭和6）年には、別に『完訳我子の悪徳』が、また1935（昭和10）年には『完訳我子の美德』が文教書院から出版されているがこれも版を重ねている。

2. 村上胡磨雄訳『教師と父母との再教育』

この訳書は“Ameisenbüchlein oder Anweisung zu einer Vernünftigen Erziehung der Erzieher”（『蟻の小書、あるいは教師の合理的教育への助言』）の翻訳である。1928（昭和3）年に東京・イデア書院から出版されたものである。訳者の村上胡磨雄は1884（明治17）年生れ、京都大学で教育学を専攻し、1917（大正6）年から3年間、成城学園で教鞭をとり、大正期の新教育運動に参加した人である。第二次世界大戦前は神奈川県立鎌倉師範学校で教え、戦後は愛知学院大学の教授であった。

3. 細谷俊夫訳『教育余論』、徳田穰訳『蟻の書』その他

この二つの訳書は『世界教育文庫』の第一部学説篇第七巻に収録されているものである。出版は1934（昭和9）年に世界教育文庫刊行会から出されたものである。

細谷俊夫訳『教育余論』（附『新学校の予告』）は、ザルツマンが1784年に書いたもので原題“*Noch etwas über die Erziehung nebst Ankündigung einer Erziehungsanstalt*”である。

徳田穰訳「蟻の書」は、ザルツマンが1806年に発表した“Ameisenbüchlein oder Anweisung zu einer Vernünftigen Erziehung der Erzieher”（『蟻の小書、あるいは教師の合理的な教育への助言』）の翻訳である。

その他、ザルツマンの著書の紹介等については、『世界名著大事典』（1960年・平凡社）第一巻の中で『蟻の書』が紹介されている。この項の執筆者は田花為雄である。

「著者はドイツの汎愛派の教育者で正確な題は『蟻の書、あるいは児童の不合理な教育への

助言』で、児童の欠陥、悪徳、悪習の原因は大部分が〈側の悪例・無監督・悪教育〉に求められるとの観察から、親を憎む、疑い深い、親を軽視する、きょうだい不和、薄情、残忍、復しゅう心、しっと、他人の不幸を喜ぶ、その他すべてで36項目の児童の悪化が実例によって語られている。《コンラート・キーフェル、あるいは児童の合理的教育への助言》“*Konrad Kiefer oder Anweisung zu einer Vernünftigen Erziehung*,” (1796) と表裏する著作である。広くかつ長く読まれた。日本では大村仁太郎の翻案《教育寓話我子の悪徳》が1904年に出了。」

以上のように紹介されている。

V 日本におけるザルツマン研究

わが国におけるザルツマン研究は、ドイツの教育思想家のペスタロッツ、ヘルバルト、フレーベル等に比較して非常に少ない。

しかし、大村仁太郎の美文の翻案、田制佐重、村上胡磨雄、細谷俊夫、徳田穰の立派な翻訳によって明治末期から大正・昭和10年代まで教育に関心をもつ一般の人々によって愛読された事実はすでに明らかにしたところである。

ここでは、日本におけるザルツマン研究を述べてみたい。

1. 入澤宗壽の『汎愛派教育思想の研究』の中の「ザルツマンの事業及び思想」

この研究は、1929（昭和4）年に出版されたもので本文471頁に及ぶ大著である。その中で、ザルツマンに関する箇所は「第二章汎愛派教育思想の実際的发展」の「第三節ザルツマンの事業及び思想」である。

内容をみると次のような項目によって組み立てられている。

- 一 ザルツマンの経歴及び事業
- 二 シュネップエンタールの学校
- 三 教育の意義、目的、可能
- 四 主体論及び客体論
- 五 体育論

- 六 訓育論
- 七 教授論
- 八 各科教授
- 九 学校管理論其他
- 十 ザルツマン教育論の特色

ザルツマンに関する頁数は、251 頁から 296 頁までである。今日わが国におけるザルツマン研究の代表的労作である。入澤宗壽は 1929（昭和 4）年に汎愛派遣跡巡の折にシュネップエンタールのザルツマン学校を訪問している。

2. 田花為雄の「ザルツマンの伝記に対する一つの補遺」(Eine Ergänzung zum Leben Salzmanns)

この論文は田花為雄が、1932（昭和 7）年から 1934（昭和 9）年にかけてドイツ教育史の研究のため在外研究中 1932（昭和 7）年 8 月 21 日にシュネップエンタール (Schnepfenthal) のザルツマン学校を訪問した際、当時のドイツのデッサウ (Dessau) 市所在アンハルト邦立図書館所蔵の汎愛学校遺品 (Reliquiae Philanthropini) の中から親しく選択した史料をもとにして、ザルツマンがバセドウ (J. B. Basedow) の汎愛学校 (Philanthropin) を辞してシュネップエンタールに自己の学校を新設するに到った動機について詳細に論述したものである。

この論文で田花為雄は、従来ドイツの教育史研究者の間で定説となっていたザルツマンがデッサウを去る三つの理由、つまり (一) 学校の経営及び管理は一人の長の手にあるべきこと。

(二) 生徒は家族的組織の中に生活すべきこと。

(三) 学校の所在は田園に置くべきこと、に対して、もっと重大な外的要因があったのではないかという推論のもとに、ザルツマンと学校当局との手紙などを中心にして実証的に論究しているものである。

3. 教育(学)辞典にみる「ザルツマン」の項目の記述について

(一) 篠原助市著『教育辞典』

この辞典は 1922（大正 11）年に東京宝文館から出版されたものである。

Christian Gotthilf Salzmann (1744-1811)

汎愛派に属する有名なる教育家、独逸エルフルトの近傍ゼムメルダに生まる。牧師の子なり。ランゲンザルツァ・エルフルト等の中学校を経て、イエーナ大学に神学を学び、1768 年エルフルトの近傍の一小村の牧師となり、後エルフルトに転ず。1781 年バゼドウに招かれて、デッサウの汎愛院に宗教を教授すること 3 年なりしが、同 84 年ゴータ侯 エルンスト二世の補助を得てゴータ近傍のシュネップエンタールに学校を起し、汎愛主義に基づきて教育を施し爾後終世を著述と教育とに捧げたり。

ザルツマンの主義とする所は汎愛派と異なる所なけれども、氏は学校を一大家族の如く組織し児童を「健康にして理性に富み、善良にして且快活なる人」に養成せんが為に特に注意を払へり。……学校は恰も一大家族の如く、人呼ぶに「父ザルツマン」 Vater Salzmann の尊称を以てせり。シュネップエンタールの学校が今尚存続する唯一の汎愛学校たるを得るはザルツマンの人格的感化与って力ありと言わざる可からず。

氏の多くの著書中最も有名なるは「小さき蟹の書」 Krebsbüchlein (1780) (大村仁太郎訳「我子の悪徳」) 及び「小さき蟻の書」 Ameisenbüchlein (1806) (大村仁太郎訳「教育者の教師」) なりとす。前者は当時の家庭教育上の欠点を諷刺的に述べたるもの、後者は教育者の自己修養を説けるものにして、「児童の凡ての過失及び欠点の原因は省みて教師自己の内に発見せざる可からざる」ことを説けり。其の他コンラート・キーフェル Konrad Kiefer (1796) (大村氏訳「我子の美德」) 亦広く行はる。

(二) 城戸幡太郎等編『教育学辞典』(岩波書店版)

この辞典は全五巻であり、ザルツマンの項目は第二巻の 872 頁から 873 頁である。この「ザルツマン」は執筆者が入澤宗壽である。

Salzmann, Christian Gotthilf (1744 ⁶/₁—1811 ¹⁰/₃₁)

<生涯> ドイツ汎愛派の教育家。エルフル

トの近傍ゼンメルダ村に牧師の子として生れ、5歳の時から母に読み方・小詩、父に聖書・ラテン語を教へられた。6歳から12歳まで村の学校に通ひ、それよりランゲンザルツァのギムナジウムに入り1761年イエーナ大学に入って神学を研究し、68年ロールボルンの牧師となった。この時バセドウの書を見て学校設立を企てた。

1781年バセドウに招かれて、デッサウ汎愛学校 Dessau Philanthropinum に赴任して83年まで宗教教授を担当し、また著作に従事した。85年自己の案を行うべくゴータのシュネップエンタールに学校を開いたが、それは今日も尚唯一の18世紀の田園家塾、労作学校として存続して居る。1809年リューマチスに襲われ、1811年10月遂に没した。

〈シュネップエンタールの学校〉 最初の協力者には、ドイツ体操を創めたことを以て有名なグーツムーツ、手工と園芸に力をそゝいだブラッシュ R. H. Blasche (1766~1832) 及び教へ子にして有名な地理学者リッターがあった。

1808年には開校20年となり、『シュネップエンタール教育所に就て』を公にした。それによると、この学校では心身の調和的発達に留意し、徳の教養につとめた……中略……

時間割は夏は4時、秋は5時、冬は6時に起床し、祈禱の後朝飯、7時より11時まで教授及び作業、11時より2時まで体操・中食・休養、2時より5時まで教授、5時夕食、7時まで自由作業、8時夜食、10時就眠。……

秋には全生徒の徒歩旅行を行ひ、体力の鍛錬、博物・工業・地理の知識の習得等を目的とした。又学習奨励のために好成績の場合を記録し、評点50の者は姓名の下に黄釘を打ちつけた。この表彰板は今日猶その廊下にかけてられている。又、勤勉なる者に十字徽章を与へて祝祭日に之を佩用させた。

それには鋤の章とD・D・Hの字を彫って、思考・忍耐・活動の象徴とした。即ちこの三つの徳は入学の際に先づ教へて実行させる校訓であった。……

此等の行事が示す如く、生活が教育であった

ので、ケルシェンシュタイナーがいふ如く、18世紀に於ける理想的労作学校であった。

〈思想〉 彼によれば教育は少年の力の発達及び練習であり、教授及び範例により少年の素質及び使命に応じて理想又は目的を実現することである。而して理想又は目的は理性的にして善良なる人であり、将来幸福にして満足なる生活を送るやうに指導することが教育である。

教育者の資格としては、健康にして快活なること、児童と共に語り共に交はること、共に働くこと、自然物・人工物の知識、手工の知識及び技能を有すべきことである。……中略…… 訓育の手段として命令禁止及び人工的手段を去るべしとするが、賞はこれを用ふ。表彰板及び十字徽章はそれである。試験は半年毎に行つて進級させ、罰は罪は賞の変形として罰金・減点・職務上の地位を下すこと・叱責を行ふ。……

教授の目的は思考と観察とを修練し、力を習ふ。直観と自己活動とは之を最も力説し、各科教授に就ても詳論した。

彼の教育論は組織的でなく、实际的識見に富む。「教育学の講義を聴かんよりは一日二時間児童を実際に観察せよ」とは彼の持論である。

……

4. 平凡社版の『教育学事典』

この『教育学事典』は全5巻より成り、1955(昭和30)年に出版されたものである。

「ザルツマン」についての記述は第3巻に納められている。この項目の執筆者は、田花為雄である。

Ch. G. Salzmann (1744~1811)

ドイツ汎愛派教育家・教育著述家。1761年~1764年イエーナ大学で神学を研究。1781年デッサウの汎愛学校 Philanthropinum に宗教教師および拝牧師として赴任。かたわら著述に従事した。同校教師の著作にかんする学校内規をめぐって学校当局とのあいだに葛藤があり、またこの学校の管理そのほかが自己の所信とことなることもあって、1783年汎愛学校をやめ、翌年ゴータ Gotha 侯後援のもとにシュネップエン

タールにかれの理想の学校（教育塾 Erziehungsanstalt）を開設、没するまで“父ザルツマン”として多くの子弟の薫陶に献身するかたわら教育的著述に従事した。その学校は“ザルツマン学校”Salzmannschule といって、いまでも存続している。

ザルツマン勤務当時のデッサウ校では、その管理は数名の幹部からなる理事会の手でおこなわれていたが、彼は学校は校長の一手に統率されるべきもので、生徒は校長を家長とした家族的組織のなかで生活するべきものとした。これにくわえて、彼はなお田園での教育を理想とし、小都市ではあったがアンハルトの首都であるデッサウにはあきたらなかった。こうしてシュネップエンタールの教育塾はうまれたのであったが、この精神と施設とはのちの田園家塾、なかでもリーツ（Lietz, H.）のそれとはまったくおなじである。

教育の目的を健康・理知的・善良・快活な全人の陶冶において体育を重んじ、よき教育は道德の基礎のうえにのみありうるもので、正しい学校教育は学習と修徳を包括するものでなければならない。道德教育には教師の人格が何物よりもまして必要であり、罰はとくに体罰はさけるべきであり、褒賞は必要であるとした。また児童に勤労のよろこびと公益のためにはたらく憧憬とをうえつけなければならないとした。彼の学校では宗教・独仏英伊希羅語・地理・博物・歴史・工業・数学・簿記・書字・図画・唱歌・音楽・手工・体操・水泳・乗馬・舞踏など人生に有用有益な知識・技能を教えた。また作業・労働・徒歩旅行 Wanderung があり、生活がすなわち教育であり、学習も労作的であって、のちに理想的労作学校として評価されたのはこのためである。同時代者ペスタロッチ（Pestalozzi, J. H.）とは、理想上直接の連絡はないが広くみれば同一線上に位置する点が少なくない。

以上わが国の代表的な教育学辞典によって「ザルツマン」の項目をみるとかなり詳細に記載されて居り、ザルツマンについては教師また

は教育に関心をもつ人々には広く知られていることが理解できる。

VI おわりに

わが国におけるザルツマンの教育思想は、ヘルバルト（F. Herbart）やペスタロッチ（J. H. Pestalozzi）そしてフレーベル（F. Fröbel）らのように、近代日本の教育史の表面に現われなかったが、明治末期から大正そして昭和（戦前）の三代にわたって、学校教育、家庭教育にたずさわっている広範な国民各層に愛読された事実是否定できない。

また、ザルツマンの教育思想の今日的意義を考えると、わが国の教育の直面している幾多の困難な問題を解決するための基本的な考え方が明示されている。「子どものすべての欠点や不徳の原因は、大部分、父または母、両親に求むべきである。」との立場から、教育の任務は子どもたちの諸能力を発展させ練磨することによって、子どもたちを人間にまで育成することであり、成長、発展こそ一切の教育の本質である。そして、この任務の達成には、教育者自身が先ず教育された人でなければならない。こうした考えの中に、われわれは、現代教育の進むべき方向を見出すことができるのではなからうか。

主な参考文献・資料

- (1) Festschrift zur Hundertjährigen Jubelfeier der Erziehungsanstalt Schnepfenthal. Salzmannschule, 1884.
 - (2) Die Erziehungsanstalt Schnepfenthal (1784～1934). Friedrich Ausfeld, 1934.
 - (3) C. G. Salzmann-Bibliographie. Wolfgang Pfauch und Reinhard Röder, Weimar, 1981.
 - (4) 入澤宗壽『汎愛派教育思想の研究』教育研究会, 1924年.
 - (5) 田花為雄「ザルツマンの伝記に対する一つの補遺」『速水博士還暦記念心理学哲学論文集』岩波書店, 1937年.
 - (6) Inge Pfauch-Ausfeld 夫人からの田花為雄教授、筆者への書簡.
- （その他、参考、引用文献は文中で示した。）